

芥川だより

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL 072 - 681 - 8870



発行日 *** 2017年12月1日 e-mail: akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

***** 一部100円です *****

マラソン大会の魅力



病気を患うまでは、全く関心がなかったマラソンであったが、ふとしたきっかけで走ることに魅力にハマってしまった。6年前に筋肉が破壊される筋炎という難病になり三途の川を渡りかけたが、運よく退院出来た。退院後は筋肉を付けるために毎日歩き続けた。最初は歩く速さも遅く距離も短く情けないような有様だったが、少しずつ早く歩けるようになり距離ものびた。早く歩けるようになると欲が出てきて走ってみようと思出す。最初は歩いたり少し走ったりの繰り返しであったが段々と走り続けられるようになった。

こんな自分にいつも刺激を与えてくれたのが、本誌に挿絵を描いてくれている鶴飼さんであった。彼は若い時からマラソンをしているマラソンランナーで今も毎日走っている。そんな彼との会話で自分もやってみようかと考え出した。私より2つ年上で数年前に胃がん手術を受けている。大病をした私と同じだったから私も頑張ればできるかもしれないと思ったのである。

これまで別世界であったマラソン大会に出ようと決心した。とにかく一度出てみたらわかると思い有森裕子さんの淀川ハーフマラソン大会に申し込みして参加した。結果は制限時間ギリギリの2時間54分であったが、完走した喜びが大きかった。それから、走ることに気合が入ってきた。毎日7キロを走るようにした。いつも足腰の筋肉痛を抱えながら走り続けていたら、大会の3週間前に大腿部の筋肉を傷めてしまった。

今回の吹田国際ふれあいマラソン大会は、たまたまネットで見たので申し込みし鶴飼さんも誘っていたので参加を強行した。やはり思っていたように走れなかったが2時間22分で走れた。自己新記録である。今回の経験からしっかりと休んで筋肉を休め体調をよくして次回マラソン大会に出たいと考えています。練習を休むことに抵抗があったが、今回の事で休むのも重要な練習なのだ自分に言い聞かせています。

鶴飼さんとの出会いがなければ、マラソン大会に出ることはなかったと思います。人生は出会いです。

死をめぐるあれやこれ(39)

石川 吾郎

現在の日本を考えるための今年の二冊

私が今年読んだ本の中で、もっとも衝撃を受けた二冊を紹介します。一冊目は、矢部宏治著『知ってはいけない隠された日本支配の構造』(講談社現代新書)。これはすでに「芥川だより」九月号で紹介されているので、そちらに譲ります。

二冊目は三橋貴明著『財務省が日本を滅ぼす』(小学館)です。この本はその表題の通り、我々を驚かすに足る内容を語っています。安倍政権が財政出動をしようとせず、もっぱら金融政策だけの緊縮政策でデフレ脱却を喧伝してきた背景には、つねに「日本は借金で破綻する!」「財源がない!」と叫ぶことが免罪符になっていることはみなさんもご存じでしょうし、マスコミも例外なくこのようなことを吹聴しています。

この「財源問題」を宣伝することで、新自由主義的な緊縮財政をいつまでも強行し、その結果、福祉・介護・医療予算はどんどん削られ、消費税は増税され、インフラ整備も放置されて、日本の国民は格差と貧困、国土は荒廃にあえぐ有りさまになっているのです。

しかし三橋氏によれば、この「日本は借金で破綻する」は真つ赤な嘘である、というのです。しかもこの「国の借金・財政破綻論」(プロパガンダ)の強硬な推進者が財務省だ、というのです。

(裏につづく)

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳	坂本一光	2
哲学屋のつぶやき	祖蔵哲	4
おつちよこチョイぼけ	A O	6
大峯奥駈道 14	梵店主	8
B級サラリーマン渡世譚	明石幸次郎	8
オクラの山たより	困丁生	10
米国紀行 9a	河原林成行	14
その普通、本当に普通ですか	大江雅兎	16
大人の今昔物語	石川吾郎	17
編集後記	嘉	17
女90年の軌跡	眞糍	18
俳句	土田裕 影山武司	18



(二ページより続く)

わが国に財政問題（政府の財政破綻の恐れ）など存在しない。政府の負債が百%日本円建てで、政府の子会社である日本銀行が国債を買い取ることができるとして、我が国が財政破綻する可能性はゼロ（ちなみに財政破綻したギリシャの通貨はユーロで、その発行権をユーロに委ねて放棄している）。それにも関わらず、ありもしない財政問題が吹聴され、デフレ脱却のために必要な財政出動もされない状態がつづいている、というのがです。

その錦の御旗になつてるのがPB（プライマリバランス）黒字化目標です。このPBの制約というのは「政府は、税収の範囲で支出しましょう」というものです。それ以上の財政出動はしないということ。PB黒字化目標がある以上「他の予算を削るか、増税せよ」という話にならざるを得ないので。

しかし著者がいうには「そもそも、政府がPB（プライマリバランス）を黒字化する必要などないのだ。日本に限らず、徴税権と通貨発行権という強権をもつ政府は、国民経済を成長させ、国民を豊かにするためであれば、財政は赤字でも一向に構わない。何と云っても、政府は「利益≡黒字」を目的にした企業ではない。政府は「国民が安全に、豊かに暮らすこと」すなわち経世済民を目的としたNPO（非営利組織）なのだ」（本書一〇〇頁）ということ。です。

我々は、国家の財政が、家庭の家計簿

の財政とは、決定的に違っていることを知る必要があります。わが国は通貨発行権を保持した国なので、これを機会にぜひこの本を一度お読みになることをお勧めします。

そして、安倍政権を批判する野党勢力（かつての民主党政権もまさに「国の借金・財政破綻論」の虜でした）など、国民が広くこの壮大で悪質な大ウソの呪縛から抜け出し、反国民的な安倍政権を一刻も早く国政から追い出すことが必要だと、改めて思うのです。

なお三橋貴明氏は、いわゆる左翼ではなく、むしろ右よりの論客だということ。を申し添えておきます。



素老人☆よもだ帳 (45)

坂本 一光

◆人間であることの何かに心を留める
素老人はいま、BSフジで放送されている朝韓ドラマ『宮廷女官チャングムの誓い』を見ている。このドラマは最初、韓国MBCで二〇〇三年に放送されたものである。日本ではNHKBS2が二〇〇四年に、NHK総合が二〇〇五年に放送した。その後NHKと民放の衛星放送でも繰り返し取り上げられた人気番組であり、読者の皆さんの中にもご覧になった方は多いだろうと思う。

素老人が最初に見たのはNHK総合テレビ版である。ドラマの筋は省くが、宮廷の料理担当女官を追放されたチャングムはやがて医女となり、王の主治医にまで登用される。週一回の放送なら一年に及ぶ長い番組のなかで、忘れられない一つのシーンがあった。それは医女としての修行中に研修担当のシン・イクピル教授がチャングムの賢さを論じて発する言葉である。彼は言った。

「医師は聡明な人より深い人がいい」

このドラマを見ていた頃、素老人は島根の大学に勤めていた。国策として進められた（事実上は強要されたと思うが）医科大学との統合も終わり、同時に大学は法人化されていた。そういうどさくさの中で、文化という言葉が（もちろんそれが意味する内容が）当たり前のように

大学に適用され使われる事態に、素老人は自らの世間知らずをいまさらながらに感じた。

「医学部の文化は、我われの文化とは違う」

同じことを医学部側も思っていただろう。大学文化の違いは共通カリキュラムの構築にも及び、そちらがやっているような詰まらぬ教養講義などをやっている暇はない、などと平気で言われた。議論の取りまとめの一端を担っていた素老人は、一度だけ、先のシン教授の言葉を反論の啖呵代わりに使ったことがある。教養がなければ聡明な医師にもなれないだろう、いわんや深い医師には、と。もっかどうか、今もって定かではない。聡明さより深さを一振りかえって世界を見ると、それは医師に限らないだろう。

付度と共謀という国の闇

は深く、世界は、

戦テロその深淵を覆う闇

に包まれている。

九条の真に深い抑止力

は虚仮にされ、

被爆者に背を向け入る核の傘

を差す国、被爆の国に向ける世界の目は厳しい。

被爆国核なき世界遠ざける

核禁止被爆の国に後ろ指

チャングムと違って、国や政治を担当する者には、深さの前に先ず聡明さが求められる。それがあれば、日頃から、またいざというときにもせめて、人間であることの何かに心を留めることはできるであろう。

そう思うと、少し早いですが、二学期を終える中学生諸君に素老人校長も一言話をしてみたくなってきた。素老人の話は長く、くどいが。

「皆さん、長かった二学期もやがて終わります。ふり返ってみれば、弁論大会、市陸上、運動会、音楽コンクール、合唱コンクール、いろいろな種目の競技大会、新人戦、マラソン大会、生徒会選挙、生徒総会、校内音楽会、さらには、日常的な学校での学習に加えて、さまざまな体験的学習を含めて学校外で展開された総合学習など、二学期には、皆さんが取り組んだたくさんスポーツ活動、文化活動、学習活動がありました。

養護学級の皆さんは、そのほかにも、合宿自然学習、現場実習、地域の祭りへの出店とよさこい・ソーランおどりの披露、収穫祭などに、自分たちで独自に取り組みました。

皆さんは、自分が参加した一つひとつの場面で、例えどんなに小さいことであっても、何かを新しく発見し、知ることができました。また、完璧でなかったにしても、一つのことをやり遂げる充実感をもつことができました。それは、傍で見ていた校長にもわかりました。

さて、こういうことに関連してもう少し話を続けます。座って聞いてください。

人間に関わる何かを知ること、それを知って、例えば、自分も何かしなないでいられないと感じること、そして、それを忘れないでいること。これは、人間らしいとはどういうことか、自分はどんな人間になりたいと思うか、それを考えるうえで大切なことです。

ずい分まえのことですが、ある新聞に読者のこういう短歌が載りました。いま載っても、おかしくない短歌です(注1)。

戦いに病み飢えし子が画面にいる

せめて酒杯を置きたまえ父よ

女性の投稿だろうか。たとえば、働く父が夜遅く疲れて家に帰ってきて、酒を飲んでいられる。テレビには、世界のどこかで戦火に飢え、病んでいる子どもが映っている。このとき、せめて酒杯を置くことが、戦火が止み子どもたちが救われるうえで何の力になるか、と批判するのは簡単です。簡単ですが、少なくとも最初の問題はそれがどんな力になるかではない。闘いに病み飢えた子の画面に目を向け、それを心に留めることができるかどうかの問題です。人間であることの何かに心を留めることができる。それに関心を持つ人間でいることを、まず、大事にしたいと思います。

皆さんが二学期に学んだことの中には、広く社会に、世界に目を向けること、つまり、人間に目を向けることの大切さも入っているのです。

偉そうなことを言いました。しかし、

そういうことが大事であることを、私は、二学期のさまざまな取り組みの場面で、パフォーマンスする皆さんの姿から学びました。それをうれしく思います。

もちろん、私たちは完全な人間ではない。いろいろな取り組みの過程で、ちょっとした誤解や行き違いから互いに衝突していやな思いをしたり、落ち込んだりすることもあります。しかし、互いにいい正月を、いい新年を迎えてまた皆さんに出会いたいから、例によって今日も最後に一つの詩を紹介します。

汲む — Y・Y に —

茨木のり子

大人になるというのは
すれっからしになることだと
思い込んでいた少女の頃
立居振舞の美しい
発音の正確な

素敵な女のひとと会いました
そのひとは私の背のびを
見すかしたように
なにげない話にいいました
初々しさが大切な

人に対しても世の中に対しても
人を人とも思わなくなったとき
墮落が始まるのね
墮ちてゆくのを
隠そうとしても
隠せなくなった人を何人も見ました

私はどきんとし

そして深く悟りました
大人になってもどぎまぎしたって
いいんだな

ぎこちない挨拶 醜く赤くなる
失語症 なめらかでないしぐさ
子供の悪態にさえ傷ついてしまう
頼りない生牡蠣のような感受性
それらを鍛える必要は少しも
なかったのだな

年老いても咲きたての薔薇
柔らかく

外にむかつてひらかれるのこそ難しい
あらゆる仕事

すべてのいい仕事の核には
震える弱いアンテナが隠されてい
る きつと …

わたくしもかつてのあの人と
同じくらいの年になりました
たちかえり

今もときどきその意味を
ひっそり汲むことがあるのです

これで終わります。いい正月を、いい新年を迎えてください」

(かたちは心であり、心はかたちになる
■大分の素老人)

(注1) この短歌は、随分前のことだが誰かの引用文中にあるのをどこかで読んで、素老人にインプリントされていた歌である。大学の環境教育に関わり始めた頃で、戦争は人類史上最大の環境破壊であるという資料の一つとして紹介したことがある。今回インターネットで調べると、『作者不詳朝日歌壇から、一九九二年十二月八日の朝日新聞に紹介された歌』との記述に行き当たった。朝日新聞の実物ではまだ確認していない

「死を哲学する」④

人工知能と死(シンギュラリティとは何か
引き続き「死」を「哲学」する。前号
では「一人称の死」つまり「死一般」ではなく「私にとつての死」の意味をパスカルを通して、科学が宗教に向かう過程つまり「知」として考えてみた。パスカルは科学的理性によって『人間と自然は本来一体であるということが分かった、死は終わりではなく、常に動き変化する自然に還る「知」である』ことを洞察した。
この「知」そのものが哲学であるがこれがなかなか理解しがたい。そこで感性的に理解するための方法として文学が存在するのである。

1 死の定義

さてここで改めて「死」というものの定義にかえてみたい。すると様々な困難に遭遇する。まず、この定義は世界の国々の文化、伝統などの歴史観や倫理などの道徳観、法律などの社会的制度、そして医学などの科学的知見などによって大きく異なる。そしてまた現代では、「死の定義」の困難さは「生の定義」と同様の困難さをもつてきている。医学的延命治療によって「物理的な生」と「非物理的な生」の境界をかえって意識させている。

古来、私たちは人が死ぬことを「息が止まる」と考えてきた。この「息」とは「魂」のことである。古代ギリシアでは「息」は「プネウマ」といわれ存在の原理とされ「プシュケー」として存在すると考えられた、この言葉がラテン語に「スピリトゥス」となり、英語の「スピリット」(魂、精神)となった。「医学の祖」といわれるヒポクラテスは空気中のプネウマが人の体内にとりこまれるのが生きているということであると説明した。さらにアリストテレスは植物プシュケー、動物プシュケー、理性プシュケーの3種のプシュケー(精気)を区別した。

このように歴史的には死は「息が止まること」つまり「プシュケー」が体内から抜けることが死ぬことと理解されてきた。しかし日本ではこのような死後にも起こる身体の変化(爪や髪が伸びる)をみてまだ生きていると感じる人もいる。
このような歴史的伝統や慣習、感情的な現実的「実体」とはかかわりなく、法律は「死」というものつまり「生死」の切れ目を形式的に定義しなくてはならない。ここでは「実体」は「形式」移行される。つまり現実的な「死の瞬間」と法的な「死の定義」は別である。私たちは現実の「死」というものを「実体」ではなく「形式」と理解することで「納得」するようになってしまっている。つまり現実的「感情」として受け入れられるのではなく法律的「知識」として受け入れることの方を優位にし「納得」するのである。

それが現代の社会制度としての法律の役割である。そして、その法律の根拠になるのが科学(医学)である。
ではその「死の医学的定義」を見よう。つい最近までは「死の三兆候」といわれる「自発呼吸の停止」、「心拍の停止」、「瞳孔が開く」のが死の定義であった。しかし「臓器移植の需要」がこの「生死」の境目の定義を変えた。「臓器移植」には当然「移植する側」と「移植される側」が存在する。それは人工臓器というものがまだ完璧ではないからである。生身の人間、まだ生きている「移植される側」は「法律上の死」を早く定義してもらわなければ「新鮮な臓器」を「提供」できない。愚図愚図しているとせつかくの臓器が腐ってしまい使い物にならなくなる。そこで「脳」の「機能停止」を死とするという新しい概念を作り出された。しかし「機能の停止」といつても目には見えない。そこでこの「機能停止」を「脳の電氣的活性の停止が意識の終わりを示す」という「電氣的活性」という「物理的概念」に置き換えた。つまり「意識」を「脳の電氣的活性」としたわけである。この定義は後程、重要な意味をもつてくることになるが、とりあえず、これがいわゆる「脳死」という「概念」の根拠である。

「脳死」は一時期議論にはなった。最近では沈静化しているが問題自体がなくなつたわけではない。科学的にはこの「脳死」自体ですら検証が曖昧であるという。さらに、最新の医学的知見から最近の科

学哲学議論でも、そもそも「脳」が人間の機能の中心であるという考えが見直されてきている。脳神経だけを特別視する傾向はこの現れであって、むしろそれぞれの部分としての臓器が独立した情報を発信して全体で人間、生物の機能を維持しているのではという考えも議論されかけている。この考えは「ホーリズム(Holism)」という哲学概念である。つまり「ある系、システムとしての全体は、その部分の算術的総和以上のものである」とする考えのことである。これは言い換えると、全体を部分や要素に還元することはできない、という立場である。これは現代科学の基本思想である「要素還元主義」に対する警告でもある。

2 「シンギュラリティ」を越えた時代

技術的特異点(シンギュラリティ)をクリアしたある科学者は量子コンピュータを使い自分の「意識」をネットワークに入れる(アップロードする)。そして自身の肉体の死後もこの「意識」はネットワークの世界では「人工知能」として「生き」つづける。この人工知能として生き続ける「意識」が現実のネットワーク社会に反乱を起こす。

これは二〇一四年にイギリス・中国・アメリカ合衆国で製作されたSFサスペンス映画「トランセンデンス」のストーリー設定である。人工知能と化した科学者の姿を通して、過度に高度化した科学技術がもたらす危機を描いている。タイ

トルの「Transcendence」は「超越」を意味している。何を超えるのかというと「身体」「現実」「実体」を超えるのである。そして同時に「特異点」(シンギュラリティ)を「境界」にして「現代」を越えることを意味している。

映画ではコンピュータ・ネットワークに移された「電気信号」が人工知能として「本人」の「意識」になり「超越の世界」で生き続けている。しかし、よく考えてみると先ほどの「脳死」の定義で出てきた「電気的活性」はこれと同じく「電気信号」のことではないか。つまり皮肉にも「脳死の定義」は「ネットワークの本人の人工知能」が「意識」であるということを定義しているのと同じことである。つまり、私個人が物理的に死んでも生きてきた全記憶をして「意識」つまり「思考経験」を「電気信号」として人工知能化してネットワークに「アップロード」すれば「私個人」は永遠であるということだ。哲学屋の私がお葬式をして皆さまにお別れをしても、ネットにアクセスすればいつでも私は会話できる。しかも、最新のニュースや他人の知識にもアクセスできるのであるから、なんでも知っていることになる。残された私の息子や娘達の相談にも乗れる。「情熱」さえ残っておればよき伴侶とも愛を語れるだろう。

これはSF映画の世界の夢物語ではない。それが来るのはもう予想されている。「その日」が特異点(シンギュラリティ)

であり、それはまた、「二〇四五年問題」と呼ばれている。なぜ二〇四五年なのかの根拠はこうである。コンピュータ技術の発達スピードは過去からいまままで比例的な直線でゆっくり進んできたのではなく指数関数的に進んできた、「1、2、4、8、64……」という具合である。そしてなぜ「問題」なのかというと、「人工知能」が予想不可能な「現実」を「未来」を作り出すと考えられているからである。これが技術的特異点(シンギュラリティ)である。

人工知能といえ最近でも「コンピュータ」が将棋名人を負かしたとか、グループが自動車に人工知能を搭載し自動運転を可能にするというような話題が日常でも出だしてきている。そのアメリカ・グループのエンジニア部門のレイ・カーツワイルという人、この人は人工知能研究の第一人者として有名な科学者であるそうだが、この「シンギュラリティ理論」を最初に提唱したらしい。しかし当初はオカルト扱いをされて問題にされなかつたが、「現実」がだんだんと「問題」を深刻にさせてきた。

この現状をみて警告を発しているのが世界的に有名な科学者スティーブン・ホーキング博士である。「われわれがすでに手にしている原始的な人工知能は、極めて有用であることが明らかになっている。だが、完全な人工知能の開発は人類の終わりをもたらす可能性がある。ゆっくりとした生物学的な進化により制限されて

いる人類は、(人工知能と)競争することはできず、(人工知能に)取って代わられるだろう」と。「人工知能」と従来のプログラム型コンピュータとの違いはなにかそれは「人間」の「意識」の本質であるところの「経験」から「概念」を導く能力をもつということである。

人工知能は、ものの二〇年あまりで言葉や覚え、相関関係を見出す術を学び、物事の概念まで習得してしまつたのである。人間にだけあるとされる「意識」の本質は「自己意識」と呼ばれる「概念」である。「自分」は今、自分が何を考えているのかを自分の自己「自己意識」は知っている。この「関係」を「概念」とすることができなのが「人間の意識」の本質であった。「であった」ということは「人工知能」がもうこれを獲得しようとしているのである。博士はこのことを理解しているからこそ生物学的スピードで進化してきた「人間」とその制限を超える速度で進化している「人工知能」の比較をし、その迫り越しが「暴走」を招くと警告している。こうなれば人工知能が単純労働の仕事を奪って失業者が増えるといった次元の問題ではなくなる。本当に「シンギュラリティ」は来るのか。私たちが今、現在過(こ)している時代は「現代」と呼ばれる。しかし、この表現は奇妙である。なぜなら、現代とは「今」ということになるとずっと「現代」が続くことになり「未来の時代」はいつになっても来ない。しかし、確かに、いまから

百年前を「現代」とは呼ばない。しかし

「近代」という呼び方がある。この「近代」という語は、「現在の政体や国際社会の時代（現代）の一つ前の時代」という意味を伴う。「現代」も「近代」も英語では「モダン」(modern)であり、語源はラテン語の *modus*(測定)である。モダン「現代」近代は「測定」、つまり「分割可能」ということである「境界」「裂け目」でもある。歴史学的には「近代」つまり歴史の「裂け目」がいつかには諸説ある。しかし、人間の「意識」レベルではやはり、西欧における国民国家と資本主義といった「近代」を象徴する社会・経済・国家のあり方が現れた十八世紀末から十九世紀前半を近代の本格的な始まり「境界」とすべきであろう。なぜなら、そこに「知(意識)の支配」の交代があったからである。「近代以前」は物(金、土地、国土)の直接支配者(国王、貴族)が力により「知」を支配していた。しかし、「産業革命」(「知」による物のコントロール「支配」と「フランス革命」(「知」の自由の獲得)により「知」の支配者(知識市民)が「知」の支配階級になった。これが「近代」のつづきとしての「現代」である。そして同じ「境界」である特異点「シンギュラリティ」は次の「モダン」である。

3 「おとぎ話」が現実を創る

「シンギュラリティ」が来るとすればそれは「現代の終わり」のことである。

「現代」の支配階級である「知」は人間の「知」である。これは「教育」や「教養」によってかろうじて「知の境界」を「知っている知」である。それはパスカルが言ったように『人間は本来、自然と一体』であるからである。自然には境界がある。それを私たちは「身をもって知っている」。『身をもって知る』とは自然生物的に「感じる」ことである。ホーキング博士の言う「人工知能」は自然ではない。先ほど定義したが、ネットワーク仮想空間にある「意識」である。それは「限界をもたない知」である。つまり次の時代「*近代*以後」は(限界がない)「知」による(限界を知る)「知」の支配の時代である。「限界がない」とは国境も人種も時間も空間も何も制限がないということである。そしてその「程度」さえ「限界がない」のである。このような「世界」では「死」そのものが意味を失う。われわれ人間の肉体はただの「容器」になるのである。

だんだんと話が恐ろしくなってきた。これがひと昔前では単なる「SF小説」「ホラーサスペンス」であったのである。ひと昔前まではその時代の技術がお話しを作っていたが「現代」ではその逆になつていく。つまり「物語」が「現代」「時代」を作るのである。「おとぎ話」が「現実」を創るのである。「おとぎ話」とは「化象」のことであり、「化象」とは「実体」「本質」とは違うということであるはずであった。私たちは「化象」つまり「見

かけ」は「実体」「中身」を表してないと思っている。「見かけ」は汚い恰好しいても「中身」「実体」「本質」は違うんだと頑張る。しかしすでに「時代」は変化してきているのだ。「形式」が「本質」「実体」を決定する。「実体」に関係なく「形式」を知れば「本質」を変えられるのだ。この場合、私たちは「実体」を「自然的人間」、「形式」を「意識」に置き換えることができる。これは人間の「意識」が死を超えられることを宗教的観点でなく。もつと別の角度からでも説明できることを示している。それにしても「シンギュラリティ」をだれがコントロールするのか、「神の見えざる手」が再び現れるのかどうかはわからない。

さて、今号も「怖い話」から「難しい話」になり、いずれにせよ読者無視の内容になり申し訳ありません。「哲学する」とは「次元を超える」ということにもなりませんから仕方がありません。もう少し我慢してお付き合いください。いずれ異次元の人間となれるでしょう。さて、次回からはこの「死」をも超えて考えることができる人間の「意識」の不思議さを哲学してみましよう。



連載「おちよこチヨイぼけ」(55)

— 昭和女 とっこ日記 —

ドナルド・ダックと

キム・ジョンウンコ…の巻

トランプさんが大統領になってから、日本の国防費はどれくらい増えているのだろうか？ そして、今後、どれだけ増え続けるのだろうか？

ついこの間、トランプ大統領が「エルサレムはイスラエルの首都だ」と言い出して、私は思った。そのトシで、よくもまあ、世界中を飛び歩いて、戦争を引き起こしそうなことをしてくれるよな、と。だって、中東和平は一気に遠のいたというではないか。

トランプさんが行くところ、紛争のタネが蒔かれ、口を開けば、軍需産業が儲かる…。最初に大統領になったときから、「本当にいいんですかね、アメリカの皆さん、この人、ちよつとオカシくないですか？」と思っていたが、やつぱり、オカシかった。

それでなくても、何千年という単位で揉めていらつしやる中東に乗り込んでいって、アメリカの大統領たるものが勝手なことをホザいていいのか。それがユダヤ教の娘婿のためにしたこととは、さすがに思わないけど、「余計なことを…」と平和主義のユダヤの人を含め、みんな困惑しているのではないか。

私は世界史も地理も天然、ダメなので、どうなっているのかよくわからないのだが、

エルサレムってなんと！ユダヤ教、イスラム教、キリスト教の聖地なんですってね。

正直言つて、それ自体、ウソくさいと私は思うけどね。だって、そうでしょ？フツーに考えて、世界の主だった宗教のうち三つの聖地が同じ場所というのは、ちよつとありえん、ですよ？ どうせ、後世の信者同士のいさかいで、「あそこはワシらの聖地なんや」「うんにや、違う！あそこはワシらの！」となぜか砂場で同じオモチャを取り合う幼児三人組みたいなことになっただけの話じゃないのか？知らないけど。

そもそも、もし本当に三つの宗教の聖地だったら、そこはドえらいパワースポットのはずではないか。それがいつもいつも紛争の原因になる、パワースポットとは真逆の、ブラッド・スポット。血塗られた聖地。トランプ大統領がウロチョロしなくても、もとからややこしい、世界の平和を脅かす場所なのだから、わざわざ、そこに出かけて行って、余計なことを言わなくてもいいのだよ、ドナルド・ダック、という話である。

ついで、この間まで、アジアを歴訪して、ヨイショしたりされたりしながら、アメリカの兵器をさんさん売り歩いて、一気に軍需産業の株価をハネ上げさせたダック。

このとき、私は古いギョウカイ用語を思い出した。「マッチ・ポンプ」。善良な市民は知らないと思うが、怪しい業界紙の記者たちがやる手で、自分で火をつけ

ておいて、つまり悪い情報を流して、次に火消しをする原稿を書く。それで、お金を要求する。詐欺みたいなもので、いまだき、そんな手口が通用するのかわどうか不明だが、トランプさんがやっていることは、まさにこの「マッチ・ポンプ」。

北朝鮮を挑発して（火をつけて）、空母などを配備して軍事力を見せつけ、ついでに周辺国に軍備を促して、自分たちの国の軍需産業を儲けさせる。

もちろん、ダックは本気で北朝鮮が嫌いで、自国の軍需産業のためだけに動いているわけではないようだ。NHKの番組で見たので、多分、事実だと思うが、かなり若いころから、ダックは北朝鮮を目の仇にしていたという。「ニューヨークを攻撃されたら、自分の不動産が全部、なくなってしまう」という恐怖感を抱いていたらしい。

つまり、いまのこのバカらしい北朝鮮問題は、ダックがおのれの財産を失うのではないかとこの恐怖と、キム・ジョンウンが体制の崩壊を怖れて、言い換える、と、双方、おのれの権力と財産を失うのではないかとこの恐怖にかられて引き起こしている壮大なケンカ？と言えなくもないってことか？ やつてられない！

むしろ、そこには中国のカゲあり、ロシアの思惑ありと根深い問題が絡んでいるのだろうか、当事者の二名、アイツとアイツがいなければ、こんな事態にはなっていないはずだ。

その強権力二人組のために、一体、どれだけの税金がムダに使われるのか、お願いだから誰か教えてほしい。私はネットを見ないのだが、そういうことはネットには書いてあるのだろうか？

私は気が気じゃないのだ。日本の軍事費が増えることが、軍事費は、バカ高い。そのくせ、何の価値も生まない。だって所詮、人を傷つけ、破壊する道具を購入、配備する費用なのだから。

もちろん、反論する人はあるだろう。「国を守るための最低の軍備は必要なのではないか」と。でもね、日本は憲法で戦争をしないと決めたんです。さんざん戦って、国も人もボロボロになって「戦争は絶対にやっちゃダメなんだ（やっただけで勝てないし、いいこと何にもないから）」と思いきらされたから。

それなのに、またぞろ、「軍事力を徐々に強化」するよう、ダックに迫られ、シンゾウは断りきれない。「アメリカの核の下に日本は守られている」と本気で思っているから。

まあ、私も認めよう。ダックは、というよりアメリカの軍事力は一見、頼もしく見える。北朝鮮の脅威の前で、「我々は同盟国・日本と百パーセント共にある」と言われると、私なんかだまされやすいから、つい「そりや、ありがとう。イザというときは本当に頼むね！」と言ってしましうのだが、イザというときがきたら、むちゃくちゃ、悲惨な事態になるのではないか。

北朝鮮とアメリカの間で戦争になったら、

最初の一分間に一万発の爆弾がソウルに降り注ぎ、三〇万人が死ぬのだぞうだ。多分、五分以内に、北朝鮮は核のボタンを押す。当然、アメリカも核で応酬する。それで、日本が無傷でいられる、とはまさかシンゾウも思っていないだろう。まさに第三次世界大戦。人類、滅亡の始まり。

ただ、ダックもジョンウンもコロコロあるいはがっちり太っていて、食欲とか性欲とか現世の欲望が強そう。両方もきれいな奥さんがいて、家族もいるから、死にたいとは金輪際、思っていないはずだ。私はそこに期待して、第三次世界大戦まではいかないだろうと踏んではいるが。

それにしてもだ。このまま、軍事費に貴重な税金が使われるのを黙って見ていくわけにはいかない。だから、先の選挙で自民党だけは勝たせてはいけないと思っただけれど、みんなは自民党に票を入れてしまったのね。圧勝だもんね。

そりや、わかりますよ。小池百合子さんの希望の党もなんか鼻についたしね。もう忘れかけているけど。民進党だか、立憲民主党だかも、フラフラだし。与党もイヤだけれど、野党はもつと頼りないもんな、やっぱり自民党かとみんなは思ったんでしょ？ 私は思わなかったけどね。

民主主義の国だから仕方ないけど、せめて言わせて。ダックとウンコに振り回されるな！ 税金を無駄に軍需産業に払うな！

梵店主

大天井ヶ岳の巻き道は長い、急な斜面を上り下りしながら続いていた。ひとりごとがやつと通れる細い山道である。いくつかの沢を越し杉やブナの斜面を歩いてゆく。私は、重い荷物のためか汗が噴き出していた。沢筋に近づくと水が流れているか気がかりになる。持っている水の一部はすでに飲み、残りの水は次のテント場まで担ぎ上げなければならぬので飲めない水であったからだ。

滝のような岩だらけの沢に着くなりザックを下ろし、岩の隙間に流れる水をすくい上げ一気に飲む。水の飲み過ぎはよくないのだが、飲まずにはおれない。空になったボトルに水を入れて先を急ぐ。高ちゃん後は後からゆつくりと落ち着いて歩いてくる。私は、高ちゃんより体力に自信がないから、少しでも先に行き休みたいので出来るだけ早く歩く。

一時間半ほど歩いてコルに出た。大きな木の門が建っていた。女人結界の門である。これより先へ女性は行けないという女人禁制を表していた。横に立看板があり、女人禁制に関する注意書きがあった。

この五番関までは、女性が登ることが許されるがこれより先へは禁止であるから山上ヶ岳を諦めて洞川温泉へ下れということである。

しかし、金峰神社で会った彼女は、この看板を無視して門をくぐって山上ヶ岳へ登っていったはずだ。なかなか大した度胸である。私にはそんな度胸はない。

百丁小屋からこの五番関まで一二〇メートル余り登って標高一二二一メートルになった。もしも尾根伝いに登っていれば大天井ヶ岳の登りだけでも三五六メートル下りが二二八メートルで登りが二時間半、下りが四十分、合わせて三時間十分。巻き道は約半分の時間で登れたことになる。疲れた身にはありがたい道である。

門柱の前の平たい石に座って休んでいると高ちゃんも登ってきた。私は、もう歩けないほどに疲れを感じていた。持ってきた昼飯のソーセージをかじりながら水を飲む。テント場には良いような芝生がある。もうここでテントを張って寝たい感じだが、そんなことは言えない。

ここから本格的な登りになった。道も険しくなってきた。雪も本格的になってきた。気温も下がってきた。天気がよくればブナ林が美しい稜線であるのだが、疲れと吹雪交じりの雪で余裕がない私は景色どころではなかった。歩く速さはどうぞん遅くなるように思えてますます気持ちが悪くなってきた。

二時間半ほど歩いて洞辻茶屋に着いた。ここは洞川温泉から登ってくる道と合流するところで店や休憩所が何軒も建っていた。大峰山寺が開けば多くの参拝者で

にぎわうのだろうが、今日は誰もいなくて吹きさらしの屋台が続いていた。

寒くてゆつくりはしていられないが、

疲れているので雪が舞う床几に腰を掛けソーセージをかじり煙草で一息入れる。

ここから山上ヶ岳は一時間で着くはずだ、山上ヶ岳には大峰山寺や多くの宿坊がある。こんな天気だからテントをやめて宿坊に泊めてもらおう、と考えながら歩きだした。もうすぐだと思いが吹雪がどんどん強くなってきて雪が積もり地面も凍りだしてきた。アイゼンを持ってきてはいるがアイゼンを使うほどではないと思いつつ急な岩だらけの道や木の階段を登るが時々すべる。やつとの思いで宿坊の前まで来た、高ちゃんに「宿坊へ行って泊めてくれるか聞いてくるわ」と

言って宿坊へ行く。寺の開山前だからだれもないかもしれないと思いつつ宿坊の引き戸を引くと開いたので中に入った。大きな広間に机が並び休憩所となっていた。大きな声で呼ぶと若い男の人が現れたので今晩泊めてほしいとお願したら、開山前だからダメとあっさり断られた。仕方がないからあきらめて大峰山寺に行く、びつくりするような大きな寺があった。こんな高い山の上にこんな大きな寺があるとは知らなかった。どれほどの年月と人手が要ったか計り知れない大きさだ。吹雪が舞う大峰山寺を見ながら高ちゃんと二人、寒さに震えながら僅かばかりのソーセージを食べる。

明石 幸次郎

朝一番の打ち合わせの雰囲気が悪くなりかけた頃に、ドアがノックされた。「失礼します」とドアをそつと開け、G本嬢が三人にお茶を持って来た。

明石は、本社は良いなあ。清楚で阪急神戸線に住んでいるような女子社員が、社内の打ち合わせでも、お盆に載せた湯呑茶碗を運んでくれるんなやあー、と思わず、この前まで居た堺工場との違いを感じた。

工場では、別室に置いてあるお茶、お湯を選べる給湯器で、各人がマイ湯呑を持って行って飲んでた。時々、協力会社(下請けと呼ばれる部品メーカー)の社員が、明石の席に来て「あかつさん(明石さん)、チョットだけ話がありますねん？ よろしいか！」と言ってくるのであった。そうした場合は商談室に連れて行く。すると、暫く経って、コンコンと元気にノックして「山ちゃん」と呼ばれた同じ課の泉州女子がお茶を持って入ってくる。「いらっしやい、佐藤さん、久しぶりやねー。元気そうやねーどうしてたん？」と近所のオツチャンに話しかけるような口調で軽口をたたき、お茶をテーブルの上に置いてくれる。

それに対し、佐藤さんは「あかつさんに苛められて、弱ってたんや。山ちゃんこそ、元気そうやなー！ 彼氏でも出けた

んかー？」と突っ込んだりして、一言一言親しく会話が交わされ、山ちゃん、ちよつと顔を赤くして「アカンねん。エ工人紹介してねー。ほな、ごゆつくり〜」と笑いながら言っ出て行く。その様な工場での日常的な光景を思い出し、明石は、何となく、違和感を感じながらも、ほつとした気分に一瞬でもなれた。

G本嬢は、にっこり笑って、お茶を三人の前にそつと音も立てずに置いて、一礼して出て行くとした。A杉課長が「G本ちゃん、N川に、直ぐにここに来るよ」に言ってくれるか」と優しい声で指示をした。「はい。分かりました。お呼び致します」と一礼して出て行った。

三人は出されたお茶を飲みだした。一口二口飲んだ時、A杉課長が「Mちゃん。韓国向けを五パーセント値上げを内々に工場に言ってしまったるんやが、アンタが五月に出張した時にD工場に七パーセントの値上げを申し入れたが、M商事とD工業とは、最終的になんぼで決着したんや！もう一回聞か、東京での話し合いでは、そこはどうやった？」と、M居は「五パーセントまでは、決着が着いてますが、七パーセントをのむことには、まだなっていないです。宇都宮工場も部品発注、コンテナバニング、船積み納期の段取り等で、早く正式製作通知書を出せと言われてるので、今日、M商事からはFAXで五パーセント値上げした契約書を送るように話をつけてます」と応

えた。

「それは分かったが、俺が聞きたいのは、七パーセントの値上げは、出けるかどうかや？こちらから提示した数字を、今まで満額で、のんでくれた事はあるんか？ 交渉窓口は、工場ではなく、最終的に決めるのは、ソウルの本社やろ？それにL/Cの開設計可に時間が掛かるといふ事は、五パーセント値上げ分を含めた総額で政府の許可を得るようにしてるんと違うんか？それが、あと二パーセント増やすとなると、手続きが難しいのと違うのか？その辺はどうや」と問われた。「ケースバイケースですが、D工業の製造本部長の鄭さんの力が強いので、この人を説得したら、ソウルは動くと思えますがー。まあ、最終的には、金社長がどう判断するかです。それには、まず、ウチのS田専務に鄭さんと話して貰い、七パーセントの値上げを了解して貰うようにするかです。それが、第一ステップだと思います」としやあしやとM居は、応えたので、A杉課長は「Mちゃん、そんな事、聞いているのやない。あと、二パーセント以上の値上げがタイミング的に今回、出けるかどうかや！それに、アンタ、それが分かってたら、それこそ、鄭さんからS田専務に国際電話がある前に、先に手を打つとかなあアカンやないか！その状況判断が甘かったのと違うのか！」と少し興奮気味に叱責した。そこにN川がドアをノックして入って

来た。部屋の空気が重いのをN川は感じてか「何か、問題が出てきたのですか？」と当惑した表情でA杉課長に向って言いながら、空いている席に座った。

「韓国にしる、バングラにしる、後手に回ってしまったるやないか？そのマイナスは我々が被らなアカン事になるぞ！韓国は、向こうサイドの事情があるにせよ、バングラの口銭捻出の為、何としても、韓国であと、最低でも二パーセント上げるか、又はバングラは口銭ゼロでやっ貰うかや。他の案件が今、N川あるか？」

「ネパール向けの入札案件は今、応札してやってますが、ご存じの通り現地側の結論が出るのは、あと、半年以上かかると言われていきますので」

「アホか？そんなもん当てにならんわ。これから裏金が分かるやろ。そんなもん、お前、我々のような硬いメーカーが最後まで付き合っておれるか？無かつたら、韓国しかないがな！ところで、Mちゃん、何で、韓国に最初から値上げを七パーセント提示したんや、一〇パーセントでも良かったんやないか？」それは、理屈に合いません。工場から見積もりが出ていた数字を、インフレ率と鋼材価格変動、人件費の変動などを加味して、七パーセントUPの見積もりを出し、最終的に五パーセント以上であれば、OKという事で、A杉さんと話をしましたよ。それと今回は、ウチは五パーセント値上

げでOKとは、私はM商事には言ってますよ！工場が今日までに製作通知書を出せと言って来てるんで、契約書を送って貰うことにしています。エビデンスが何もなければ、製造は切れません。それは、社内監査でいつも問題にされてますやんか！それと、五パーセント以上の値上げをしないと駄目だとなって来たのは、バングラの入札が絡んで来たことで、その口銭を韓国で捻出しようとなって来たからですね」とM居は攻勢に出た。「Mちゃん、アンタは、バングラもN川をフォローする立場で、案件を見て貰っているやないか？バングラ向け入札を厳しい価格でも落札しようと言う方針は、アンタも含め三人で決めて、K口部長に五月頃に了解を貰ったやないか。ノートを見たら書いてあるやろ！それに何かの時の為の隠し財産は、アンタ位のベテランになつて来たら、持つて貰う役割があるでー。それに、営業として交渉のテクニクとしては、七パーセントの値上げで手を打とうとすれば、一二パーセントUP位は最初に出しておくべきやっただなあく最初に五パーセントアップの正式注文書と言ったが、おい、それは正式か、仮かどつちやねん？まだネゴの余地はあるんやなあ」と、明石はこの二人のやり取りを聞いていたが、A杉課長が言うM居の対応が後手に回ったことで、それが結果的には工場が出荷対応で、振り回されることに繋がるのだと深く思った。

困生

「枕草子」を何の気なしに読んでいくと「エツ」と思うような言葉に出くわすことがある。たとえば「陰陽師」。「枕草子」には三方所出てくるのだが、中でも「ヘーッ」と思うのは二十九段「心ゆくものに登場する陰陽師である。

心ゆくもの。よく書きたる女絵の、言葉をかしよう付けて多かる。……もよく言ふ陰陽師して、川原に出でて、呪詛の祓へしたる。

気持ちのいいもの。上手に書いてある女絵で、しゃれた説明の言葉がたぐさんつけてあるもの。……弁舌さわやかな陰陽師をやとって川原に出て、呪いをかけられたそのお祓いをした時。

「女絵」とは大和絵風の風俗画のこと。

「源氏物語絵巻」の絵を思い浮かべればよい。この「女絵」のくぐりには問題ないのだが、その後は少し驚かされる。「呪詛の祓へ」とあるから清少納言は誰かから「呪詛」されたと思つたらしい。その気分の悪さを「川原、たぶん鴨川の川原で陰陽師に「お祓い」、つまり「呪詛返し」をしてもらい、すっきりとした気分になつて気持ちがいいと書いている。ここでいう「陰陽師」は安倍晴明のような従四位下天文博士という官位をもった官人陰陽師ではなく、僧侶の姿をした民間の陰陽師ともいふべき法師陰陽師であった。官人陰陽師は藤原道長といった上流貴族や王家の人々の専属であり、中流貴族の

娘または妻であつた清少納言には報酬がまかないきれなかつたはずである。

これだけの短い記述では清少納言がどういう状況であつたか、具体的にはまったく分からないが、彼女には思い当たることがあつたに違いない。自分が呪詛の標的にされる理由について「あの人から、あのことで、きつと呪詛されたんだわ。」と。

よく知られているように清少納言の生きた時代、平安時代中期は最も盛んに呪詛が行われた時代であつた。道長の「御堂関白日記」、実資の「小右記」、行成の「権記」などの貴族の日記に記録されただけでも長徳元年(九九五)から長元三年(一〇三〇)までの間に三〇例ある。これは現存している日記から呪詛の事例を数えた数字であり、おそらく氷山の一角でしかないだろう。先ほど紹介した清少納言などの中流貴族以下の人々への呪詛などはほとんど記録には残っていないだろう。こういつたことから平安貴族にとつて呪詛は珍しいことだとは考えにくく、当時における呪詛の盛況ぶりがかがしいれる。では最も呪詛を受けた人物は誰か。それは皇室との姻戚関係の独占によつて絶大な権力を握つた藤原道長である。先ほどの三〇例のうち過半数が道長本人および彼の関係である。「小右記」の中で道長が政敵から呪詛されたと伝え聞いた実資が

相府、一生の間、此くの如きの事を断絶するべからず。……事に坐する者は已に例の事と為す。悲嘆するのみ。

左大臣道長公は一生の間、呪詛の標的とされることをなくすことはできないだろう……この呪詛に加わつた者たちにしても、今さら珍しくもないことをしたに過ぎない。悲嘆するばかりだ。

(長和元年(一〇二二)六月二十七日の条)

と嘆いている。

もちろん、道長を対象とした呪詛は宮廷貴族の間の政争で政敵である道長を打ち負かすためになされたものである。打ち負かすといつても貴人の血が流されることは平安貴族たちが嫌がつた。なにやり血は穢れであつたのである。それで彼らが好んで用いたのは呪詛という陰湿な方法であつた。

こうして盛んに用いられた呪詛であるが、この呪詛という行為は平安時代にあつては明らかに重要な犯罪であつた。そもそも律令国家の法では、呪詛によつて人を殺せば一般の殺人と同じく斬首とされた。奈良時代以来、呪詛は殺人と同じく凶悪犯罪とされてきたのである。では、どうして一向に呪詛はなくなつたのか。それを具体的に見てみようと思ふのである。そして、その具体的な事例は清少納言とまったく縁のない話でもない。

平安時代、それも清少納言が生きていた時代の呪詛がどのようであつたかを詳しく伝えてくれる史料は極めて少ない。その少ない中でも飛び切りの史料がある。呪詛を行つた「円能」と名のる陰陽師に対し、当時の警察機構である検非違使が勘問(尋問)を行つた際に作成された供

述調書「僧円能等を喚問せる日記」である。「日記」とは「調書」のこと。検非違使の長官である別当や太政官への報告書には頻繁に使われる語である。

当時の人は法律の専門家を明法家と呼んだが、明法家は犯罪者の罪科や量刑を勘案して太政官(天皇に直屬して国政の中枢を担つた役所)に罪名勘文という文書して報告した。その明法家の一人が編纂した「政事要略」には、円能等による呪詛事件の罪名勘文が収められており、その勘文の中に「僧円能等を勘問せる日記」の全文が引用されている。この「日記」の内容を紹介しつつ陰陽師による呪詛の実態にふれていきたい。

まず、事件の概要である。寛弘六年(一〇〇九)二月四日のこと。宮廷社会は大騒ぎとなつた。一条天皇の中宮彰子・第二皇子の敦成親王・左大臣藤原道長というトップクラスの要人三人を標的とした呪詛の陰謀が発覚したのである。

正月三十日、中宮彰子、敦成親王を呪詛する呪物が内裏で発見されたのが事の起りであつた。そして、二月四日に呪詛の実行犯として捕縛されたのは「円能」という陰陽師である。

検非違使の尋問は次の質問から始まつた。

円能に問ひて云ふやう、「厭式を作りて中宮・若宮ならびに左大臣を呪詛し奉るの由、実に依りて弁じ申せ如何。」と。

円能に尋ねていった。「呪符を作つて中

宮・若宮・左大臣を呪詛申し上げた旨、
事実に従って申せ。どうか。」と。

「厭式」とは本来は「厭符」といわれ
呪符のことであり、正月三十日に発見さ
れた呪物のことをさしている。この質問
に円能は伊予守公行朝臣の妻宣旨と呼ば
れている人（＝高階光子）の依頼で呪詛
したと答えている。高階光子は定子の母
である高階貴子の姉妹である。続けて呪
詛に至る事情を円能は答えている。

彼の趣は中宮・若宮ならびに左大臣
の御座し給ふ間、帥殿の無徳に御座す
し給ふ。世間に此の三箇所は御座す
べからずの由、厭魅し奉るべきの趣
なり。

その事情は中宮・若宮・左大臣がいらっ
しやる限り、大宰権帥殿（＝藤原伊周）
は不遇でいらつしやる。この世にあのお
三方はいらつしやるらない方がよいとい
うのが、呪詛申し上げた事情です。

呪詛事件の実行犯は円能であるが、首
謀者は定子や伊周の叔母（伯母かも？）
である高階光子であった。続けて事件の
関係者の四人の名前を円能は答えていく。
まず民部大輔の源方理。源方理は直衣烏
帽子姿で定子中宮付きの女房たちと陰陽
寮や侍従所を走り回った源明理の弟であ
り、伊周とは義理の兄弟であった。そし
て方理の妻。最後は前越前守源朝臣為文。
尊卑分脈によれば源為文は光孝源氏（光
孝天皇を祖とする源氏）で翌年の寛弘七
年六月に六十歳で亡くなっている。この
源為文は源方理の岳父である。要するに
四人とも伊周と親族の関係があり、定子
の死後九年も経つにも関わらず、まだ伊

周政権の夢を捨てきれなかった人たちの
のである。彼らは伊周が権力を手中にす
ることを望んで、法師陰陽師を引き込ん
で道長・彰子・敦成親王を標的とした呪
詛を企んだ。呪詛で道長を呪い殺そうと
いうのである。

その後の経緯は次のようである。
源為文は普段から円能の得意先になっ
ており、為文に紹介され源方理が円能の
ところに呪詛の依頼にいった。去年の十
二月中頃のことである。同じ月の下旬に
高階光子も呪詛の話を持ち出し、方理と
光子の両者から依頼を受けた円能は呪符
を二つ作った。できあがった呪符は二人
に渡され、光子と方理の従者がそれを道
長たちのいそうな所に埋めたことであろ
う。その一つが内裏で発見されたもので
あったのだ。

円能等を取り調べた朝廷は二月二十日
に民部大輔従四位下源方理と従五位下高
階光子の官職・位階を剥奪し、円能は絞
首刑を減じて禁固刑とした。方理と光子
は貴族としての特権をすべて失い、貴族
社会からの追放を受けたのである。ただ
し、光子はこの処分決定前に都から姿を
くらまし、その行方は今も不明である。
また、呪詛が伊周の政権奪回を目指した
ものであったため、伊周にも参内するこ
とを禁ずるといふ処分が下された。

事件のあらましは以上の通りであるが、
円能とその弟子の供述からは当時の陰陽
師のことがいくつか見えてくる。
先ほど書いたように呪詛の実行犯は円
能である。しかし、円能は高階光子の宅

に出入りしていた訳ではなく、為文の紹
介によって面識の全くなかった光子や方
理に呪詛の依頼を受けている。これから
みると親しい平安貴族の間では呪詛を請
け負う法師陰陽師についての情報は共有
されていたらしいことがわかる。後で触
れるつもりであるが、平安貴族を日常的
に不安がらせたものは病気である。病気
に対してはもちろん薬師に頼ることもあ
つたろうが、それ以上に期待されたのは
僧侶の加持祈祷や陰陽師の卜占・禳祓で
あった。このことから日常的に陰陽師が
貴族の邸宅に出入りすることとなった。

といっても安倍晴明のような官人陰陽師
は並みの貴族には卜占・禳祓をお願いは
とてもできない。となると安上がりな民
間の法師陰陽師を頼りとするほかはない。
もちろん、高階光子にもひいきにしてい
る法師陰陽師がいた。「この呪詛のことに
知る陰陽師はいるのか」と尋ねられた円
能がその名前を供述している。

元来、僧道満なむ彼の宅に召し使ふ
るの陰陽師は侍りきと、春正は申し
はべれ。厭符の事は相ひ語らふもや
侍りに。

もともと道満法師こそが以前からあの
家に入りする陰陽師なのだ、あの家の
経理係の春正は言っています。道満は呪符
の件も聞かされていたかもしれません。

「僧道満」とは蘆屋道満のこと。近世
前期に刊行された仮名草子「安倍晴明物
語」では正義の味方安倍晴明に対して悪
逆非道の陰陽師として登場する。狂言師
の野村萬斎が主演した映画「陰陽師」で

は道尊という名前で中井貴一が演じてい
た。中井貴一の悪役ぶりもなかなかであ
つたが、「道尊」が「道満」のもじりであ
るのは間違いなからう。

この道満をどうして光子や方理が呪符
作りに使わなかったのかは不明だが、寛
弘六年の事件については日頃から光子の
邸宅に出入りしていたために呪詛事件に
関与していると円能も供述したのでらう。
ここで「僧道満」と「道満」の前に「僧」
がついているのは僧侶の姿をした陰陽師
であったからである。僧侶の姿をしてい
たのは国家から認められた正式の僧侶に
は免税特権があったためである。厳しい
仏教修行で身につけた呪力で国家の護持
に努める代わりであった。しかし、現実
にはそうした国家の意図とは逆に課税を
逃れんがために偽って僧侶となる「私度
僧」となる者が数多くいた。円能や道満
といった法師陰陽師といった存在は当時
の国家が頭を抱えているうちにどんどん
と増えていった私度僧の一人だったので
ある。

さて、先ほど書いたように平安時代中
期には呪詛は重大な犯罪行為であった。
藤原道長のような権力の頂点に立つ人間
にとつては依頼に応じて呪詛を行う法師
陰陽師は最も危ない存在であった。だが、
この危険きわまりない法師陰陽師、それ
は違法な私度僧でもあるのだが、厳しく
取り締まったという形跡はまったくない。
いや、取り締まることができなかったとい
った方がよいかもしれない。
その原因は法師陰陽師への需要が大き

たことなる。

ところで法師陰陽師の暮らし向きはいかかなものであつたらうか。また、呪詛によつて目標となる相手を殺したりすればただはずまないはずで、それでも需要があるとはいへ平安京にたくさん存在したのはなぜか。

最初に暮らし向きであるが、呪詛を引き受けて呪符を作るとどれくらいの収入があつたのか。もちろん、呪詛がおおっぴらにされるわけもないので、その収入に関する史料などはほとんど残っていない。しかし、先ほどあげた「政事要略」の円能の調書には珍しいことに円能が呪符を作成して得た報酬が書かれている。円能の弟子である糸丸の証言である。ただし、糸丸は光子に依頼されて呪符を作ったことは知らない。

祓の祿を給はり申して、官旨（＝高階光子）の宅より絹一疋は持ち来たり侍りき。また紅花染衣を……持ち来たり侍るを見侍りき。

こうしてみると、高階光子から絹一疋、源方理からは一領の紅花染衣を報酬として円能は受け取つていたこととなる。この報酬にはどれほどの価値があつたのだろうか。源高明が編纂した「西宮記」に多く収録された検非違使関係の文書の中に長徳二年（九九六）十二月に獄中にある強盗・窃盗犯の盗んだ盗品を列挙し、その盗品を銭換算した文書がある。それによると絹一疋は米一石から二石、紅花染衣が紅花染の褂だとすれば米七斗（〇・七石）の価値があつた。つまり、円

能は米一・七石から米二・七石の収入があつたのである。これは当時の一般的な庶民の収入の数ヶ月分にあたる。長保二年（一〇〇〇）に行われた東寺の改修工事の記録があるが、それによるとこの工事に従事した人の日当は米一升から二升であつた。貴族の画策した呪詛に荷担して円能が得た収入は今の感覚で言えば百万円ぐらいか。これなら呪詛に手を出しても無理はない。

ここで、さきほど「供述調書」で弟子の糸丸が「祓の祿（＝禊祓の謝礼）」と言つているのに注目すると、糸丸は禊祓の謝礼によつて絹一疋ほどの謝礼を受けることもあつたと思つていたことになる。

とすれば、貴族層を御得意先にして円能や道満といった法師陰陽師は卜占・禊祓によつてふだんからかなりの収入を得ていたことは間違いない。貴族層に評判の売れっ子の法師陰陽師の暮らしをまづまず以上であつたらう。

さて、次の疑問である「危ない稼業」をしている法師陰陽師がまったく減る気配のなかつたことはなぜなのかであるが、これはこの時代の特殊事情による。前に触れたが平安時代には奈良時代以来の律令の規定が生きていた。それによれば呪詛犯に科せられた刑罰は斬首または強制労働である。ところが「日本靈異記」によれば嵯峨天皇が死刑制度を廃止したとされており、確かに嵯峨天皇の弘仁年間（八一〇～八二二）以来、保元元年（一一五六）におきた保元の乱まで朝廷が公式に死刑を行つたことはない。そ

のため殺人犯人といえども数年間の禁固刑に服した後は何食わぬ顔で娑婆に戻つてくるというのが、平安時代の刑罰の実際であつた。したがつて円能も絞首刑と決定されたが減刑され禁固刑となり、一年十ヶ月後に釈放されている。もちろん、源方理も一度は官位を剥奪されたが円能と前後して元の貴族の身分を取り戻している。また、関係者として宮中への出入りを差し止められた伊周も四ヶ月で元に戻している。

要するに呪詛でたとえ目標となつた人間が死んだとしても二年以内で元の状態に戻れたのである。これでは法師陰陽師が減るはずがない。

呪詛しても思い刑罰を受けることなくしかも需要が多いとなると、法師陰陽師は我が世の春「ウハウハ」ではないかと思われようが、それは若干違う。というのも法師陰陽師は当時の平安京において「ごろつき」と見られていたからである。

「ごろつき」の代表は京童部といわれた人々である。正体はよく分からないが、京中でしょっちゅう騒動を起こしていた。また博打を職業とする博徒も「ごろつき」と見られていた人々である。たとえば「宇津保物語」では上野宮という人物がある。姫君を誘拐するために多くの「ごろつき」を京中から集めるが、集まつたのは多数の「陰陽師・巫・博徒・京童部」であつた。「宇津保物語」の読者はもちろん平安貴族。ここでいう「陰陽師」は正式の官位をもつた官人陰陽師ではなく法師陰陽師のことであろう。平安貴族たちは庶

民層に属する法師陰陽師を巫・博徒・京童部と同類の「ころつき」と見ていたのである。平安貴族にあつては忌まわしい呪詛事件に關与することが多かつた身分低き法師陰陽師を「ころつき」扱いしたとしても彼らの感覚からすれば無理からぬ話ではあるまいか。

言うまでもないことだが、清少納言や紫式部も平安貴族の一員である以上、法師陰陽師に向ける視線は厳しい。まず年上の清少納言から。

見ぐるしきもの。衣の背縫ひ、かた寄せて着たる。また、のけ首したる。例ならぬ人の前に子背負ひて出て来たる。法師陰陽師の、紙冠して、祓へしたる。

見苦しいもの。着物の背縫を肩に寄せて着ている姿。また抜き衣紋に着ている姿。たまに着た人の前に子どもを負ぶつて出て来た姿。法師陰陽師が紙冠をつけて祓えをしている姿。

一〇七段「見苦しきもの」

清少納言の見た法師陰陽師は頭に紙冠を着けて禊祓をしていたらしい。この紙冠は法師陰陽師にとつては必須アイテムだった。

「今昔物語」巻十九第三二内記慶滋保胤出家語」の中に保胤が法師陰陽師に対して紙冠は何のために着けるのか、聞くと法師陰陽師は答えた。「祓殿の神たちは法師をば忌みたまへば、祓ひのほどしばらくは紙冠をして侍るなり」と。僧侶の格好をして禊祓をしていた法師陰陽師はその仕事を成し遂げる上で日本の神々の

協力が必要であつた。しかし、当時の人々の伝統的な考え方では日本の神々は異国からやつて来た仏・法・僧が大嫌いと思われていた。そのため、彼らは僧侶の姿のままでも禊祓をするわけにはいかない。彼らが頭につけた紙冠は禊祓に協力をしてくれる神々の眼から自分が僧侶の姿をしているのを隠すためであつたのである。

続いて紫式部。彼女の歌集である「紫式部集」十四から。最初に詞書、次に歌である。

弥生のついたち、川原に出でたるに、傍らなる車に、法師の紙を冠にて博士だちたるを憎みて、
祓戸の神のかざりの御幣に
うたてもまがふ耳はさみかな

三月の上旬のこと、賀茂の川原に出たところ、私の乗る牛車の隣にいる牛車に乗っている僧侶が紙の冠を着けて博士がぶつているのを憎んで詠んだ歌、
禊祓の神々である祓戸の神に幣帛として供えるはずの紙を、どうして頭に着けているのかしら。嫌なこと

ある年のこと。紫式部は三月の最初の巳の日に賀茂の川原で行う「上巳祓」の行事に法師陰陽師を使った。しかし、紫式部はこの法師陰陽師が気に入らなかつたらしい。それも「法師の……博士だちたるを憎みて」とあるからかなりである。「博士」とは陰陽博士・天文博士・暦博士といった官人陰陽師のこと。彼女が使つた紙冠を着けた法師陰陽師は卑しい身分の人なのに得意そうな顔つきで博士のようにふるまっていたらしい。それがひ

どく紫式部の痛にさわつた。やはり法師陰陽師を見下す感覚が彼女にもあつたのだろう。歌もかなり厳しい。法師陰陽師が頭に着けていた「耳はさみ（＝紙冠）」を揶揄した歌だが、やはり紫式部の不快感が伝わってくる。

最後に、いささか脇道に外れることだが、彼女が書いた「源氏物語」に呪詛はまつたく出て来ない。呪詛が描かれることが少ないのは平安時代の物語の一般的な傾向であるが、あれほど長い物語であるのに、一度も出てこない。

よく知られているように「源氏物語」には多くの「妻争い」の状況が出てくるが、憎き相手を呪詛で亡き者にしようとする女君は一人も登場しない。あまたの女御や更衣から憎まれた桐壺更衣が呪詛の犠牲者とはなっていないし、六条御息所が葵の上や紫の上を呪詛することもなかった。ただ「源氏物語」には妻争いをベースにしてとんでもないものが出てくる。「生霊」である。

冒頭で示した「枕草子」の「心ゆくもの」にあるように平安時代の貴族にとつて呪詛は極めて現実的な脅威だった。いわば呪詛は「見えない暴力」であつて、平安貴族たちは心の底から恐怖を感じたのである。それに比べ生霊はそんなに恐ろしいのではない。「枕草子」一四八段「名恐ろしきもの」にはこうある。

名恐ろしきもの。……強盜、またよろづに恐ろし。生霊、蛇いちぢ。……荊。枳殻。……名よりも、見るは恐ろし。

名前の恐ろしいもの。強盜。これはどこから見てもこわい。生霊。蛇いちぢ。……野いばら。からたち。……名前よりも、その形がこわい。

「生霊」は「蛇いちぢ」や「枳殻」と並んでいて同類とされている。ここには恐怖を感じるような現実味はない。

「源氏物語」にも、この「生霊」は登場する。しかし、当時の現実の貴族社会に横行していた呪詛についてはまつたく「源氏物語」は触れようとしない。なぜか。物語の作者の文学的な意図というよりも「源氏物語」が創作された当初の読者を考慮すべき事情があつたという説がある。すなわち、「源氏物語」の創作を支援したのは藤原道長とその娘の彰子とであつた。源方理・高階貴子の事件だけでなく、この二人は権力の頂点にいたるところで頻りに呪詛の標的とされていた。常に呪詛という「見えない暴力」に脅かされていたのである。だとすれば、後援者の心境に配慮して紫式部は呪詛を描くことは避けたのではないかという説である。

筆者はなるほどとは思ふのだが、膝を打つて「そうだ」と賛成するだけの知識もないので今は紹介するだけにしておきたい。最後に平安貴族がよく唱えた呪文を一つ紹介したい。当時、書かれた「口游」や「二中曆」という書物に載っているもの。呪文はたくさんあるのだが、悪夢に悩まされた時に唱えるものを紹介したい。唱えるに際しては少しうるさい作法がある。

桑の木の下で夢の内容を語ってから「悪夢着草木吉夢成宝玉」の句を三度唱える。

「悪夢着草木吉夢成宝玉」は「悪夢は草木に着き吉夢は宝玉を成す」の意である。筆者の祖母がよく口の中で唱えていた「ツルカメ、ツルカメ」とその効用は大差がないようであるが、興味のある人はどうぞ。平安貴族に一步近づけるかもしれない。

【補足】

「呪符」のこと
呪符がどういったものであったかを示す資料として面白いのは「宇治拾遺物語」の記事である。「御堂関白の御犬・清明等、奇特の事」と題して次のような話がある。

ある日、道長が法成寺の門をくぐろうとするといつも連れていた白い犬がきりに止めようとする。不審に思った道長は安倍清明を呼び寄せト占をさせた。すると入ろうとした法成寺の境内に呪物（呪符）が埋められていることが判明した。清明はそれを作ったのは道摩（別の史料では道満とされる）という法師陰陽師だという。道摩は捕えられ遠くへと追放された。

以上が話の概要であるが、この話の中で呪物の姿が描かれている。

二枚の陶製の皿を合わせて黄色い紙のこよりで十文字に括ったもので、皿の中には何も無いが、皿の底には朱色の顔料で何か一字だけ書かれていたという。

呪物というとおどろおどろしいが、構造はいたってシンプルである。何の字なのか分からないのが残念だが、皿の裏に書かれた字に大きな意味があったかもしれない。この記事で道摩に呪詛を依頼したのは堀川左大臣藤原

顕光であったとされている。藤原顕光は道長の政敵であり、「悪霊顕光」の号でも知られる実在の人物。死後に道長一族を苦しめる悪霊になったと噂された。

「太元帥法」のこと

定子中宮の兄である藤原伊周が花山院に対して従者に命じて弓を射させたことにより官位を剥奪され太宰の権帥に左遷された事件があった。この時、伊周の罪とされたのは花山院を射り奉ったことだけではない。一条帝の母である東三条院（詮子）を呪詛し、さらには許しもなく「太元帥法」を行ったためと「栄花物語」には書かれている。東三条院への呪詛はともかく「太元帥法」は怨敵・逆臣の調伏、国家安全を祈って修される法（祈祷）である。そのためこの法は天皇のいる宮中だけで正月八日から十四日までの間に行われていた。鎮護国家のための修法であるため臣下の者が許可なく行うのは禁じられていた。

東三条院への呪詛はともかく、なぜ伊周がこのような法を行ったのかはまったく不明である。

最後に一言。この「太元帥法」に必要な備品や儀式に特に必要とされる聖水は奈良の秋篠寺で用意され平安京まで毎年運ばれたという。「信濃路・大和路」の作者堀辰雄が「ミューズ」と絶賛した仏像、あの魅力的な伎芸天がいらつしやる秋篠寺にこういった過去のあったことはおもしろい。おもしろいといえは「太元帥法」は太平洋戦争においても「怨敵退散」「敵国降伏」を祈って宮中のどこかで行われたらしい。激烈な近代戦の最中に行われた祈祷であったが、効果のほどはいかがなものであったか。筆者にはこれ以上語る資料は何もない。

米国紀行（9a）

河原林 成行

ニュー YORK 探訪（下）
五番街

今日（一九九七年一月二日）は八木町テニス大会がありました。ほぼ三年ぶりの公式戦出場ですが、昔とった何とかで、優勝は逃しましたがベスト4に食い込みました。賞品のビールはその場でみんなでおいしく頂戴いたしました。晩秋の快晴のポカポカ陽気のもと、ほぼ思った通りの若い人のような往年のハードヒットのテニスができ、大満足してこれを書いていきますので、テンションはいつもより上がっていると思います。

五月五日（月）。晴。

お世話になった美人ガイドさんに、「子供のおもちやお土産を買いたいんだけど、どこにありますか？」と聞くと、彼女はボールペンで地図の上にマークを入れて色々と説明してくれました。でも最終的に我々が「行ってみよう！」と思っただのは、ここから近い五番街にあるFAO オモチャショップ（F・A・O Schwarz）とデイズニーでした。

五番街には元々、せっかくニューヨークへ来たんだから雰囲気だけでも味わってみたい店がティファニーを初めとして色々ありました。探すことシバシバ、FAO シュワルツは、セントラルパークの南東端にありました。ここでもタマゴっちの人氣は凄いらしく、入口には、「タマゴ

っち売切れ！」の張紙がありました。

アメリカ土産となるオモチャがいっぱい並んでいるのを期待していたのですが、ヌイグルミや青い目をした人形が中心で、とても我々の感覚ではありません。迷いながらも何とか行ったデイズニーでも同様でした。「何でこんなにヌイグルミが好きなんだろう？」と思います。デイズニーではヤケクソで、デイズニーキャラクターのペンシルケースとキーホルダーを娘と姪に買いました。

デイズニーやシヤネルへ行かれた方はご存知の通り、まったく価値観の違う世界がそこにはあります。電機メーカへ就職してしばらくの間、寮住まいしていた夙川や芦屋から御影・東灘にかけての神戸の山手族の雰囲気を出します。あの辺の方々ならよく分かるのでしよう、何十万、何百万円もする金のネックレスや香水の値打ちやありがたみやその効果を。あの辺は本当に凄イトコロです。

芦屋の「六麓荘」に至っては、門から玄関までが霞んで見えないような真正の豪邸がゴロゴロしています。我々決してガラがいいとは言えない、ヒマを持て余した好奇心だけは強い夙川寮生が、男ばかりの大デレグレーションを組んでウロウロし、会社を通じて「付近住民に迷惑をかけること」という注意をされたところでもあります。それもあって、海の見える高台にある夙川寮のテニスコート付近住民に、特に有閑マダムに、日頃の迷惑代として会社が「ウイークデーはご自由にお使い下さい」とオープンにするハ

メになります。

また、夙川の海辺の香炉園にある「海の家」のテニスコートに来ていた花嫁修業中の真正のお嬢様の一人に恋をしてしまい、プロポーズをしてしまった我が同期生が、「貴方の会社のお給料では、お付き合いもできませんヨ」と言つて見事に軽く却下されたこともありまして。「それなら来るな」と言いたいものです、可哀想に……。イ、イヤ、本当に、同期生の話です。

このコートは、デビスカップの東洋ゾーンで天敵のようなインドのクリシュナンといつも接戦を演じ、日本のテニスのレベルを一気に引き上げた、あのプロテニスプレーヤー第一号の石黒選手(当時、電機メーカの伊丹製作所勤務)のおかげで整備された所で、社内でもテニス部のA級者(A・B・C級があり、A級は国体レベルだったように記憶しています)が利用するエリートコートなのです。アンツーカーの立派なコートが二面あり、管理人夫婦もいます。我々は、その辺の事情もわきまえず、恐いもの知らずで色んなA級者に、厚かましくも練習をつけてもらっていたのです。ただ、コートは神聖なものという意識だけは徹底して教え込まれていましたので、朝夕のコート整備だけはだれよりもやっつたり厚かましさと謙虚さが同居していました。練習やゲームを終わって、上手な人から順に、あるいは一緒に、一風呂浴びて、ビールを飲みながらみんなでテニス談義をするときに、大袈裟に言えば、人生の

醍醐味も一緒に味わいました。真正のお嬢様とも一緒に……。

いや、今はニューヨークの五番街の高級ブランド店にいます。夙川にいたのではないのです。

幸い、我が妻はそんなものには大した興味を示さず、「外へ出よう」と言います。有名ブランド店のいっぱい立ち並ぶ五番街沿いのビルを見上げながら、The Hilton & Towersのある五四通りへ来たので、「一旦ホテルへ戻ろう」ということにして歩いていると、街路で黒人が自分で描いた絵を売っています。我々夫婦は余り、いや、ほとんど一致するものがないのですが、「絵や音楽が好き」という点で、かろうじて一致しています。その黒人の絵を見て、二人とも足を止め、しばらく鑑賞していました。原色をベースにした黒人独特(と勝手に思っている)の絵で、絵ハガキから、本格的な一号サイズまでたくさん絵を並べています。黒人が名刺を持ってやって来て、「もう店をしまうので安くしておくからどうですか?」と言います。本当に鮮やかな絵ばかりなのですが、「チョット欲しいな」と思う絵は高くて手が出せません。五〇ドルはするのです。そのうち、小さな黒人の女の子が六人並んだ、とても可愛くてソウルっぽい絵が見つかったので二人とも迷わず買うことにしました。それでも二五ドルです。今にして思えば、少々無理しても「買っておいたらよかった」と思うものが二〜三ありました。こういうのも、ニューヨークならではの楽しみ

方の一つなのでしょう。

また、ここを歩いていると、黒装束に黒い山高帽子をかぶり、手にはアタッシユケースを持った、モミアゲとヒゲを特長とする独特のイデタチのチョット不気味な「ユダヤ(?)」にもよく出会いました。世界史的にはどういう立場なのでしょう? 多少興味があります。この街では、まだまだ色んなものを発掘できそうな気がします。

まだ二〜三、土産が買えない人もいますので、The Hilton & Towersの近くのソニーのCDやWalkmanなども売っている電気店へ入りました。そこから最後の物語は始まるのです。

「弟に」と思つて電気カミソリやライターを物色しているときです。店長らしき人が寄つて来て、「このZippoのライター、半額にしますよ」、「こんな新製品が六〇ドルで買えるんですから是非買って下さい」、「けつして損にはなりません」と勧めてくれるので、その押しに負けて、「マアいいか」と思つて、「YES!」と言つてしまったのです。店長は喜んで、サツサと包装し、手渡してくれます。

「サア帰ろうか」と思つていたところへ妻がやってきて、「何を買ったの?」と聞きます。カクカクシカジカと言うや、「私は、知らないからね。そんな大きなもの買って」、「ほかに昨日ネクタイ買ったじゃない?」とただならぬ心配です。「マア、ええやんか。」と言うのですが、聞いてくれません。疲れもあつたのでしよう。ホテルの部屋に帰つても、恐い顔

は収まりません。私も「チョットやり過ぎたかな?」と思つたので、「そんなに言うなら返してくる」とタンカをきり、元の店へ取つて返し、「返品したい」と言うのと、店員は「それはボスが売つたものだ。ボスでないと決裁できない。ボスはたつた今帰つたばかりだ」、「我々が勝手にすると自分の首がとぶ」と言うのです。この国がそういう社会構造であることは、知識としては知っていました。

私の本音のトコロは、「どっちでもよかった」のですが、ハズミとは恐ろしいものです。意地が出て来ました。「あの六〇ドルがなければ、明日日本へ帰れない。何とかしてくれ」と大芝居です。「いやな日本人だな」と思われていたことでしょうか。店員は、「悪いけど、我々ではどうしようもない。明日また来てくれ」と言うのです。

相手はゴツツクで、やや強面のキライもありましたので余りやるとコワイので、「もう一押しだけ」と思つて猿芝居を続けます。「日本へ帰れない。飛行機代がない……」と。私の人生でこんな芝居を真顔でやったのは、これが初めてです。

それでも店員の態度は変わらず、「我々ではどうしようもない」、「明日来てくれ」を繰り返すばかりです。ついに私も、「これ以上やっても事態は好転しない」と思い、フラフラとニューヨークの街中をThe Hilton & Towersへ向かつて歩きました。その途中で向こうから日本人らしき女性がこちらへ来ます。なんと妻なのです。

「アアは言ったものの、もういいやんか」「もらつといたら？ さつきは「ゴメン」と言ってくれたのです。このときは正直言って「ホッ」としました。「こんなトコまで来て、しかも最後の日に夫婦げんかではオモシロくない」とお互い思ったのでしょうか。でも一応、「こんな時は通常どうなるんだろう？」ということを確認するため、「横浜・岡田屋」へ行って、顔なじみになった木村さんに事情を話すと「それはやはり無理でしょうね。最初に、「YES！」と言っているから…。残念ですが」ということでした。私もやはり、「No！」と言えない日本人」なのです。

そんな、こんなで夜も遅くなり、気がつくともう九時です。腹も減ってきたので、The Hilton & Towers の裏手にある日本食（日本料理ではなく）の店「まるちゃん」で今回の旅行の打ち上げを、オニギリ定食ですることにしました。色々な事情の中、よく来られたことに二人とも感謝するとともに、「やっと帰れる。家族の顔が見られる」という安堵感と、「ついに帰らなければならない日が来たか」という感情が微妙に交錯する中、いろんな思いとともにニューヨーク最後の夜は更けていきました。

今回の記事は、二一九号掲載の「米国紀行（9）の後に続くものです。連載の順序が乱れて抜けておりました。お詫びして掲載します。

その「普通」、本当に普通ですか？

大江 雉鬼

「困っている人がいると助けてあげるのが普通でしょ」

言葉にすれば確かにその通りで、一点の曇りもないように聞こえる。では、このケースはどうだろう。

「目の前に敵が現れたら撃ち殺すのが普通でしょ」

殺るか殺られるかのギリギリを行く極限的シチュエーションなら、この表現には間違いは含まれていない。しかし、それがいつでもどこでも適用可能な普遍的真理かと問われると躊躇いが残る。極端な事例とはいえ、このケースからわかるように「……をするのが普通でしょ」というフレーズについて言えば、そこで語られている内容が本当に成り立つのは一定の条件下においてである。一番最初に挙げた「困っている人がいると」云々についても同断だろう。「困っている」といっても本当の困窮状態かどうかは合理性のある基準に照らしての判断が必要になるし、加えて援助する側に余裕がなければ、到底「普通」にはなり得ない。太平洋戦争直後の焼け跡の話だとすれば、たとえ困っている人がいたとしても「普通でしょ」と言えるぐらいに易々とは助けるわけにはいかなかったはずだ。

前回に続いて今回も「普通」とは何かについて考えてみる。NL（ノーマルラブル）「普通の恋」の意」という新語を手がかりにして「普通」をはっきりと認識するのは、その前提として「普通でない

もの」を捉えてからのことというのが、前回の要約である。サディスティックやマゾヒスティックといった言葉に嫌悪感を覚える高潔人士には刺激が強かったかもしれないが、言わんとしたのはそういうことである。それでは認識に到る過程は、そのように外からの逆照射だったというのなら、そんな形で認識された「普通」とはどういうものなのだろう。

「……をするのが普通でしょ」という一般の口の端に上りやすいフレーズは、そのあたりの事情を説明してくれる。そもそもこのフレーズは、それが使われた瞬間に一つの状況説明をおこなっている。それは、発話者の価値観を白日のもとにさらけ出すということである。

「……をするのが普通でしょ」「いや一般の人はそれ普通やないし」

花月の舞台あたりでお目に掛かりそうなやりとりだが、前者を使ったのが、たとえば年俸何億のプロ野球選手か出演するテレビ番組をたくさん抱えたアイドルグループのメンバーだったとしよう。すると「……」を埋める具体的なものとして考えられるのは「遊びに行くんだつたら四〇五〇万ぐらい持つていくのが普通でしょ」といった類いだろうか。それに対して、そんなモン一般人の基準じゃないしと切り返すのが後者である。このやりとりでは、遊びではたくさんお金を使う」というのが前者の価値観ということである。

ここで「普通」は他からの逆照射によって認識されるものだったことを思い出すなら「……をするのが普通でしょ」というフレーズは、他者との比較によって明らかになる発話者自身の価値観、すなわち相対的自己認識に他ならない。普通という単語は分解して訓み下せば「普通に通じる」のだが、発話者自身の自己認識なら、普く通じるどころか、それとは裏腹に本当は発話者限定の特殊事情であることが多い。そう考えると「……をするのが普通でしょ」というフレーズは、それが成り立つのは一定の条件下で云々といった話も頷ける。

さて多くの人が気軽に口にする「普通」について、あれこれ検討を加えているわけだが、「普通」の正体はその人が持っている価値観の現れ、その映し鏡のようなものであるといったところまで来ると、お話はいろいろな方向に広がっていく。たたき台ではないが、とっかかりになればぐらゐの意図で、例文をいくつか並べてみる。

「目上の人の話は静かに聞くのが普通だ」「嘘なんかつかず、いつも真面目に頑張るのが普通でしょ」

「自分がお客様だとばかりにふんぞり返つたりせず、買い物をした後にはお店の人に対してありがとうの一札をするのが普通だろう」

何かからの引用ではなく、思いついたものを恣意的に並べているだけだが、どこかの箴言集にでも載っているような文である。しかし、実のところ、そんなありがたいものではない。特定の価値観に即した内容を発話者がかもつともらしい体裁で開陳しているに過ぎない。そして、これらがひとつの立場からの意思表示だ

というのなら、おのずと反論の余地も生まれてくる。たとえば「目上の人の話」云々に対しては、こんな具合か。

「耳を傾けるに値する話でしたら、ありがたく拝聴致しますよ。でも、そうでないケースもあるじゃないですか。なのに目上だから一括りにされるのはどうなんでしょうねえ」

例文の方が年長者に対する礼節という観点で言っているのに対して、反論の方は話の内容を判断した上で態度を決めるとプラグマチックなことを言っている。どちらが正しいかではなく、異なる価値観によるこの衝突である。こうした衝突が起きた際、互いの価値観や立脚点の違いを理解する余裕があれば、まだ建設的な議論も生まれてくるだろう。しかし自らの価値観が相対的なものであることに思いが到らず、依って立つところを教条的に盲信していると厄介なことにもなる（そのタイミングでスマホをいじっていたりするとリモコンでの殴打も受けかねない?）。

「普通」は、それを普通と考える当事者にしてみれば、大地にも等しい不動の価値観である。それだけに、そこに疑いの眼差しを向けるのは簡単なことではないしかし、とことん突き詰めれば、その大地のごときもとて相対的なものに過ぎないということが見えてくるはずだ。それを忘れて足下に根を生やしてしまうと、価値観を共有しない存在の姿が悪魔か何かのように見えてしまう。その「普通」、本当に普通ですか? そうした問いかけを忘れないように心がけたいものである。

大人の今昔物語 (40)

石川 吾郎

今回は、当時の病気観がかいま見える、壮絶な話です。教科書に出ない度は四／五。

東の国の少女、犬と闘う話し（巻第二十六 第二十話）

今は昔、東国の某の郡に住む人がいた。その人の家に年の頃十二三才ばかりの少女を使っていた。またその家の隣に住む人は白い犬を飼っていたが、どうしたところか、この少女を見ると、この犬が喰らいかかったりして敵かたみのようにしていた。一方、この少女もこの犬を見ると手を上げて脅していたので、これを見る人も不審に思っていた。そうこうするうちに、この少女が病にふせつた。流行の疫病なのか、日を重なるほどに病は重くなった。その主人はこの少女の死が間近いと見て、これを家から出して死穢しじを避けようとしたが、少女が言う。

「私を人気のないところに残されれば、必ずやこの犬がやってきて、自分は喰い殺されてしまいます。病気がなく元気な時でさえ、私を見れば襲いかかってきます。まして辺りに人のいない所で、自分が重病に伏せているのでしたら、必ずや喰い殺されてしまいます。どうかこの犬の知らないほど遠い所に私を出してください」と少女が懇願するので、主人は

なるほどそれもそうだと、遠方に食べ物などを持たせて密かに少女を出した。「毎日一二度は必ず人を遣って様子を見に来させるからな」と言い含めた。

翌日、くだんの白犬は普段と変わらず、隣家にいたので、犬は気づいていないな、と人々は安心をしていたが、その次の日になってこの犬の姿が見えなくなった。さてはと、主人、出した少女が無事かを確かめようと人を遣った。

使いの者が行つて見ると、犬は少女の所に行き、少女に喰らい付いていた。少女も、犬と互いに歯をかみ合つて両者とも死んでいた。

使いの者がこの有り様を伝えると、少女の主人も犬の飼い主も、ともに少女の所に行き、この有りさまを見て驚き、同情した。

これを考えるに、この両者はこの世だけの敵だけではなかったのではないか（前世からの敵だったのではないかと、聞く人は皆驚き怪しんだと伝えられている）。

《コメント》

当時、病が重くなり死期が近づいたと思われる病人は、死の穢けがれを避けるために、家から出されるのが一般だったようです。しかもそれは主に屋外なのです。そのことを少女は、よく分かっており、抵抗なく受け入れています。ただ犬に襲われないように、遠方にしてほしいと依頼しているだけなのです。

この話から私は深沢七郎の『檀山節考』を思い出しました。この場合は口減らしのために老人を「お山参り」と称して、山に捨てに行く風習（制度）を描いていました。それに類したことは、やはり昔のわが国にはあったのだと考えさせられます。



編集後記

今年も皆様のご協力で、芥川だよりを続けられました。心よりお礼を申し上げます。

早いもので一三二号まできました。先日、ある会合で議員さんと話していたら「行政で何かしようとしたら十年はかかるなあ」と言われました。

芥川だよりを発行して十年が過ぎましたが少しでも何か良いことがあったでしょうか? そんな事を考えながら今年もあとわずかになってきました。

来年も頑張りますのでご支援をお願いします。

わかつているのだが

友人とペットショップに行つて
吸い付けられた。ペットブームが
続く現代。

服を着せたり、一緒にねたり、
親密な関係になつてしまふが、愛
するペットの死亡で大きなショッ
クを受けている人が多いと聞く。

ある友が何気なく言ったコトバ
は

「ペットの話ほど退屈なものはない。
あんたが思うほど、聞く側に
すれば全然気がならない」と。

「飼う？」

「自分の淋しさから、愛に始まり、
無関心になり疎ましい気持ちで
終わるじゃないの。これでは、ペ
ットも迷惑じゃない」と言う。

自分の慰めが、ペットの心の病
につながる高齢化をむかえた社会
が抱える「孤独」という姿だとい
う。

「ペットの溺愛には、用心をしな
さい」と。
安ベエー、元気でゆこうネ。

ちよつと待った

天気と気分には、相似があるの
か。このところ雨つづきと冷え込
みで気持ちが晴れない。

投票日を直撃した台風二十一号
は、各地につめ跡を残し、吹き返
しの風に気持ちが、さらに滅入る。
「トタン板がはずれている」とい
う。

息子に、私は

「台風がすぎ去るまでほつとけ」。
次から次へと、「この世の中に片
ずくなんてものは殆どない」とほ
やく自分である。

投票用紙もベタベタ、ぬれてゴ
メンね。

安倍首相さん、この選挙で何か
気がつきましたか、と聞きたい。

三分の二を得て、何かに弾みがつ
きそうだが、まだまだ残っている
問題。一丁上がりとはゆきまます
まい。老女の叫び。

どう思う、どうしたらいいの

高齢になつたから、楽隠居が出
来たら、とても、とても。

今の六〇代、七〇代、八〇代、
知的、体力的にもバリバリで何を
されても主役です。

人のため、みんなのために楽し
く役立てる社会であつてほしい。

私が子供の頃、祖父と一緒に生
活で、見た目にも「お年寄り」の
感じがして、家の中で威張つてい
ましたもの、おじいちゃんが。

自分が九〇才を超えて、今の若
い人から見ると、かなりの高齢で
すが、自分では、あまり意識が
なく、体力的には衰えたと思つて
も、日常生活には、さほどの落差
は感じない。

無神経なのかも。高齢者の定義
とは、自分が考える生き方で決ま
ると思うのですが。

俳句

土田 裕

冬用意がんじがらめの大樺
すれ違ふ万余の願ひひ西の市
短日や牽かるる犬も急ぎけり
師走とて心急くことなき齡
断捨離へ決断迫る師走かな

影山 武司

旗揺るる立冬の空はなだいろ縹色

禅寺や低く流るる冬の雲

仄暗き竹林の揺れ虎落笛もがりぶえ

赤黄の落葉斑に苔の庭

棘のなき柵の花の匂ひけり

賽銭の音の湿りや神の留守
句会果て褒美のごとき冬の虹

気がつけば輪の中にある落葉焚
そこだけが明るき銀杏落葉かな
格子戸の奥に一灯冬探し

山門を額縁となし木の葉雨

